ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2017.9.20
39

秋期企画展

縄文人の一生 ―西ヶ原貝塚に生きた人々―

会期	平成29年10月24日(火)～12月10日(日)
時間	午前10時～午後5時
会場	北区飛鳥山博物館　特別展示室・ホワイエ
休館日	毎週月曜

観覧無料

縄文人の一生 ―西ヶ原貝塚に生きた人々―

西ヶ原貝塚は縄文時代後期を中心に形成された大型の馬蹄形貝塚です。貝塚からは縄文人が食べ終えた後の貝殻や動物の骨、こわれた土器や石器のかけらなどが出土します。現代的な感覚でいうと、ゴミ捨て場と思われがちです。しかし、これを丹念に調べると縄文人が何を食べ、どのように暮らしていたのかを知ることができるのです。また、貝塚からは人の骨が埋葬された状態で発見されます。

ゴミ捨て場に人を捨てるほど縄文人は人の死をないがしろにしていたのでしょうか。貝塚とはいったい何なのでしょうか。縄文人の想いとはどのようなものなのでしょうか。

今回の展示は、発掘調査やその研究成果で明らかになってきた西ヶ原貝塚を舞台にし、貝塚とは何か、そして縄文人が生を受けてからどのように生き、そして何を想い祈るのかを考えてみたいと思います。(鈴木)

西ヶ原貝塚出土の埋甕と中から発見された胎児の骨

[企画展関連イベント]

秋期企画展野外講座
「考古楽講座 遺跡へ行こう！秋special」

日　時：11月18日(土)午後2時～4時(予定)
　　19日(日)・26日(日)午前10時～午後4時(予定)全3回
会　場：講堂・現地(未定)
定　員：30名
申　込：往復はがきで11月7日(火)必着

秋期企画展体験講座「土偶をつくろう！」

日　時：12月3日(日)午後2時～4時
会　場：体験学習室
定　員：24名
申　込：往復はがきで11月21日(火)必着

秋期企画展講演会

日　時：12月10日(日)午後2時～4時
会　場：講堂
講　師：阿部芳郎(明治大学文学部教授)
定　員：80名
申　込：往復はがきで11月28日(火)必着

Voice

資料カードとデータベース

約20年前まで、当館の前身である旧郷土資料館では、もっぱら手書きの資料カードに頼って資料情報を管理していました。博物館における資料カードは、いわば病院におけるカルテのようなものです。当館の資料カードには、資料名や制作地等の基本情報、スケッチや寸法、聞き取り内容など多様な情報が記載されています。

一方で、平成10年、北区飛鳥山博物館の開館時には収蔵品管理システムを導入。歴史・民俗・自然・図書などの各資料情報をデータベース化し、閲覧コーナーの端末で検索・閲覧ができるようにしました。このとき「もう資料カードは不要ではないか?」との意見もありましたが、資料カードに蓄積した情報量と紙媒体への信頼性を捨て去ることはできませんでした。

そして今年12月、当館では収蔵品管理システムを更新する予定です。今回はクラウド型に転換し、今後はインターネット公開やスマートフォン上でのデータ活用も可能になります。遅いIT化ではありますが、資料情報には個人情報はじめ配慮を要する内容が多々含まれるので、慎重に進めていきたいと思います。

記録・保存が確実な資料カードと、活用・公開に適したデジタル・データ。世の中のニーズに応えつつ情報を確実に残していくため、当面の間、当館では両方の利点を活かしながら使い分けていこうと考えています。(久保埜)

収蔵品管理システム 入力画面(参考)

飛鳥山に防空壕があった頃

田中葉子（北区文化財専門員）

大地・水・人

平成24年度から28年度にかけて、北区教育委員会では、北区の人々がどのように戦中・戦後復興の時代に生きてきたのかを記録に留めるため、戦中・戦後の体験をお持ちの方にお話をうかがう聞き取り調査を行った。聞き取り調査中、防空壕は度々話題に上り、調査報告書『北区における戦中・戦後の暮らしの変遷』（平成29年刊）では、多くの人の体験の中で防空壕が触れられている。

日中戦争開戦後の昭和13年頃より、政府は各家庭で防空壕をつくるよう指導し、以後、庭や床下に防空壕がつくられていった。昭和18年頃から、個々の家で防空壕をつくるだけではなく、地域で共同使用する防空壕も多数つくられた。特に、武蔵野台地の端が区内を縦走している北区では、台地の崖面を利用して多くの横穴式防空壕がつくられており、飛鳥山の崖地にも、多くの防空壕が掘られていたという。

飛鳥山東側の線路に沿った崖地には、空襲警戒警報が出たら電車から飛び降りてすぐに避難できるよう、幾つもの防空壕の入口があった。『滝野川警察署史』（昭和50年刊）には、「昭和19年に崖の中腹に30メートル間隔で奥行約20メートルの横穴を掘り、地中で横穴を左右に連絡させた「空襲避難用横穴式防空壕」がつくられた」（231−232ページ）と記されている。王子駅からの避難者はもちろん、付近の低地側に住む人々も多数飛鳥山の防空壕へ避難していた。

昭和9年生まれの男性は、戦時中に飛鳥山の防空壕で遊んだ体験を語ってくれた。20人くらい入れる防空壕があり、そこで「空襲ごっこ」をしたという。煙突のような空気孔から、防空壕の中に公園の土を投げ入れる。赤土なので、中はもうもうと土煙になってしまい、耐えられなくなると出てくるといった我慢比べのような遊びだった。また、飛鳥山の地下には、防空壕の土砂を搬出するための軌道が引かれていたという。飛鳥山北部の頂きはすり鉢山と呼ばれ、旧渋沢家飛鳥山邸の辺りを地下への入口として、すり鉢山の下へ緩やかな勾配の軌道が引かれていた。昼間は学徒勤労動員の学生たちが防空壕を掘っていたが、夕方になると無人になった。その頃を見計らい、近所の子どもたちがやってきて工事用のトロッコで遊んだという。トロッコに子どもたちが乗り込むと上級生が走りながらトロッコを押して飛び乗り、トロッコは、暗闇の中を「ガタン、ゴー」という音を響かせながら坂道を下り、すり鉢山の下で止まった。

戦後、地上につくられた防空壕の多くは埋め立てられて家庭菜園の場になったりしたが、崖地の防空壕は、入口に柵をしたまま後年まで残されたものが多かった。飛鳥山では、戦後10年も経たないうちに、地盤がゆるんで5メートルほどの穴が2ヶ所陥没したため埋め戻したという。現在、防空壕の入口は全て塞がれていて、外からは分からなくなっている。

軍施設が多く所在した北区では、今でも区内各所で戦争関係施設の痕跡を見ることができる。一方、目には見えない一人一人の戦争体験は、語られ、記録されることによって後世へ伝えることができる。場所と記憶とがセットになって、その土地の歴史として伝えていきたいと思う。

特集／野外講座

“幻の江戸東京野菜”の10年をふりかえる

常設展示で江戸東京北郊に伝わっていた滝野川牛蒡や滝野川人参等の在来種野菜を取り上げていることから、当館では平成17年度より東京近郊で今なお在来種野菜の栽培を続けている6軒の農家を訪ね、畑で収穫間近の作物を観察しつつ園主から直接栽培の話を伺う野外講座を毎年開催してきました。その経過は以下の通りです。

- 滝野川牛蒡（狭山市笹井地区佐々木規好農園）：
  平成17年12月2日（金）同24年11月30日（金）
- 練馬大根（練馬区田柄地区橋本登農園）：
  平成18年11月22日（水）同23年11月25日（金）
- 千住葱（葛飾区新宿地区田中重夫農園）：
  平成19年12月7日（金）同25年12月6日（金）
- 小松菜（江戸川区本一色地区高津惣一農園）：
  平成20年12月5日（金）
- 大蔵大根（世田谷区北烏山地区大谷一彦農園）：
  平成21年12月9日（水）同26年12月5日（金）
- 東京独活（立川市幸町地区須崎雅義農園）：
  平成23年1月15日（土）

小松菜と東京独活を除いた他は2回繰り返したことになります。講座名は、当初「在来種野菜の畑作を見てみよう」でした。その後「幻の江戸野菜…の産地を探る」を経て途中から「幻の江戸東京野菜…の産地を訪ねる」に定着しました。その年に取り上げる野菜は担当学芸員で決めますが、訪れる栽培農家の多くは区市の農業委員会もしくは地元のJA支部等から紹介していただきました。野菜の種類に限りがあるのは、開催時期を晩秋の収穫期に充てていたことと伝統的な野菜栽培が東京近辺では少なくなってきたためです。

T字型の農具を用いて滝野川牛蒡を掘る
（H17.12.2 久保埜撮影）

住宅地迫る農地で練馬大根を観察する
（H18.11.22 久保埜撮影）

野菜の種子は継続的に栽培しないと良い形質が残せないため、一度市場で取引されなくなると復活が困難で、故に滝野川人参等は遺伝子が途絶えてしまっています。また、滝野川種の牛蒡も植物学的に種子の大量生産が難しく原種に近いものは減少しました。現在野菜の種子は国内だけではなく広く海外で生産されたものも利用して栽培されているのが実情ですが、練馬大根にみられるように、一部の篤農家は代々受け継いだ技術で自家採種して栽培を続けています。作付面積は極めて僅少で絶滅状態と言っても過言ではありませんが、講座ではそうした伝統野菜の現状も窺うことができました。また、“第2の講座”と称して、農家から分けていただくか直売所等で入手した野菜を帰宅後に各人家庭で賞味してきました。頭で理解するだけでなく、舌でも味わうことが大切だと思ったからです。

ハウスの中で本場の小松菜を観察する
（H20.12.5 平澤撮影）

寸胴型の大蔵大根を間近で観察する
（H21.12.9 鈴木撮影）

昨年3月6日（日）には講座10周年を記念して、野菜の大本である種子の近代史を専門とする研究者・阿部希望農学博士に「北豊島郡における近代の種苗業の形成」という題で特別セミナーをお願いしました。明治・大正期の滝野川三軒家における種苗業も十分学習できる内容でした。

さて、本年度は11月30日（木）に亀戸大根の産地を訪ねます。ご期待あれ！（中野）

特別セミナーで阿部博士から種子の講話を聞く（H28.3.6 安武撮影）

じっくり見てみて常設展示

用心船と水害への備え

「荒川と共に生きるくらし」のコーナーに復原された物置の中には、一艘の舟が梁から逆さに吊るされています。志茂のお宅で使われていた舟は、「用心船」とも呼ばれ、洪水の際に他所と行き来をするために使用するものです。普段は軒先などに吊るして保管していました。なぜ洪水時の緊急避難用の船とわかるのかといえば、船の舳先の側面に「免税」の焼き印が押されているからです。明治時代の初めに制定された「艀漁並海川小廻等船税規則」では、「耕作一途ニ相用ヒ候田舟及ヒ水害備ノタメ常ニ陸上ニ設ケ置候分亦ハ橋梁ニ換工渡場ノミヲ相用ヒ全ク他ノ稼方ニ不充船並船橋ハ別紙書式ニ倣ヒ願書差出船税免除ノ検印相受可申事」との項目があり、水害の備えとして陸上に置いている船は免税の対象され、検印を受けることとされました。

このコーナーでは、他にも水害への備えを見ることができます。復原された民家の前庭は、勾配をつけています。これは、土盛りにより屋敷地を高くして家を建てる「水塚」を部分的に再現したものです。また、民家の天井は、太い角材に厚い天井板が貼られた「根太天井」です。丈夫な屋根裏は、洪水の際の避難場所として使われました。このように、荒川下流域の浮間・志茂・豊島といった一帯では、洪水への備えが暮らしの中に生きていました。（山口）

イベントレポート
event report

春期企画展

浮世絵の愉しみ

3月11日(土)～6月18日(日)

名所浮世絵とは、ある特定の瞬間に切り取った「意味づけられた場所」であり、近世の人々の憧れと空間認識を示す非文字資料です。

今回の企画展では会期を4期に分ち、「時間」「空間」「表象」「絵師」を主題に「異なる主題による4回の展示実践（キューレーション）」を開催しました。狙いとしては、これまでの浮世絵展で培われてきた作家性・主題への肉薄という観点に加えて、名所浮世絵を「読み取られるべきテクスト空間」と見なし、作品と同時期の言説テクストとの交差の中で、近世の名所認識を解読することにありました。お陰様で展示意図は好評をもって迎えられ、入場者数は3万3000人を超えるものとなりました。

しかし名所浮世絵の魅力は、決して学芸員の立てた主題に止まるものではありません。
より積極的な資料へのアプローチを実現するために、今回初めて入れ替え可能なカード式図録を用意しました。今は失われた名所浮世絵に刻された空間を「自分だけのキューレーション」として選びとり、仮想展示を構築することを通して再現するこの試みは、広く公共圏に開かれた学びの場である博物館において、歴史情報を通じて自らが見知った世界を再構築し、新たな発見を見出すことにつながります。主体的な環境への参画を促すに違いないこの視点と方法について、今後も検討を進めていきたいと思います。（石倉）

学芸員の本棚

伊藤寿朗著『市民のなかの博物館』　吉川弘文館　平成5年（1993）4月刊行

本書は現在ではよく知られるようになった「地域博物館」の概念を初めて発表した書籍として、発行されてから20年以上たった今でも博物館を考えるうえで重要な書籍です。

博物館とはなにかという基本的なことから、これから目指すべき博物館像が対話形式でまとめられている本書の中で、最も注目すべき点は伊藤の考える「地域博物館」の概念です。伊藤はその設立目的などから博物館を地域志向型の博物館（「地域博物館」）、中央志向型の博物館、観光志向型の博物館という三つの型に分けました。そして、「地域博物館」は地域の様々な課題に博物館の機能を通して応えることを目的としているといいました。さらに、地域の課題は地域に生活する人々自身が主体となって発見し、取り組むものであり、「地域博物館」の役割は、そのような人々を育成し、支えることであるとしています。つまり、学芸員が展示や講座を通して、一方的に研究成果を広く教育普及する博物館の、さらにその先へ踏み出すべきだと伊藤は20年以上も前に主張していたのです。

現在、地域住民との協働を目指す博物館は当たり前になりつつありますが、その内容は実に様々です。これから私も皆様と一緒に、北区飛鳥山博物館のスタイルを作っていきたいです。（工藤）

心ふるえる事業体験

プラネタリウムで考古学「キトラ古墳が語るもの」～虎の巻～

会場：多摩六都科学館　共催：奈良文化財研究所
開催日時：2016 年11月19日（土）17：10～19：10

「プラネタリウムで考古学」・・・、およそ「古墳」とは結びつきそうもない「科学館」という会場で開かれた「サイエンスレクチャー」に参加してきました。

キトラ古墳は、奈良県明日香村にある古墳で、現在は国の特別史跡に指定されています。この古墳の埋葬部となる石室内部は、奥行き2.4m、幅1.0m、高さが1.2mと、大人が中で身動きをとるのが難しいほどの狭さですが、その石室空間を取り囲む壁には、四神像や十二支像、そして天井部には天文図が描かれていたことがわかり、大変な注目を集めました。

その狭い空間に描かれていた天文図の画像を、プラネタリウムの大型ドームスクリーンに映し出して解説するのが、この講演会の最大の魅力といえます。私に限らず、おそらく参加者の多くは、まるで夜空を眺めるか、あるいは石室内に潜り込んだかのような感覚に浸りながら、解説に耳を傾けたことでしょう。またプラネタリウムの機能を活かしながら、キトラ古墳に描かれた古代中国の思想に基づく天文図と、多くの一般の人にも親しまれる西洋占星術に用いられる星座とを、比較しながら解説することが可能であることも、この講演会の特徴でしょう。

考古学と天文学、両分野からキトラ古墳の天文図にアプローチした講演会は、プラネタリウムという空間と機能によって魅力を増し、時間が経つのを忘れさせるぐらい堪能できるものでありました。（牛山）

写真にみる　あの日あの時

謎の巨大貝塚現わる！

2台の脚立が立てかけられた四角い穴をトラロープ越しに見つめる人、カメラのファインダーを覗きこむ人、写真上段には移動式足場の後方に、今か今かと大勢の人たちが何かを待っています。左奥には敷地の外にまで人があふれています。平成8（1996）年10月12日、中里貝塚が一般公開された現地説明会のひとコマです。写真は調査担当者の説明を聞いた後、貝塚の中に設けた見学用通路に入って見学する人、その順番を待つ人たちの光景を撮ったものです。手前の穴の断面に映る白い粒々は、すべてハマグリとマガキの貝殻であり、貝層の厚さは4.5mにまで達しました。国内で最も厚い貝層です。吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡など、全国的な考古学ブームも手伝って、中里貝塚は縄文時代の「水産加工場跡」と大々的に報道されました。新聞を見て現地に足を運んだ見学者は、実に2,000人を超えました。見学できなかった方からの問合せが殺到し、追加公開した翌週19日にも1,000人が見学しました。一か月後の11月13日には天皇皇后両陛下が行幸啓され、ハマグリとマガキの貝層に見入って感心されていたことが忘れられません。中里貝塚はこの発掘調査がきっかけになり、縄文時代の社会を見直す重要な貝塚として4年後の平成12（2000）年9月、国史跡に指定されました。ちなみに移動式足場に乗ってスタッフに指示を与えている人物は、若き日の筆者です。（中島）

博物館インフォメーション

●人物往来

平成25年度より勤務されていた博物館調査員増田由貴さんの離職にともない、後任として4月1日付で工藤晴佳さんが着任しました。専門は日本民俗学です。今後皆様にお目にかかることも多くなると思いますが、宜しくお願いします。

●お気づきですか！

本年5月から3階閲覧コーナーの一角に写真のようなスタンドを設置しました。これは当館が取材を受けた記事が掲載された雑誌・図書等をいち早く公開するため考案したものです。どうぞ皆様お気軽に手にとってご覧下さい。

●常設展示観覧料の無料デー！

きたる10月7日（土）・8日（日）の区民まつりと11月3日（金・祝）の文化の日は当館の常設展示観覧料（大人300円子供100円）が無料となります。皆様お誘いあわせの上こぞってお越し下さい。

●博物館資料情報をお寄せ下さい

当館では赤羽・王子・滝野川といった現在の北区内で使われていた生活用具・古文書・古写真等当時の暮らしぶりが分かる様々な資料を常時探しています。心当たりのある方はぜひ博物館（03-3916-1133）までご連絡下さい。

毛の長さどれにするかで悩みぬく

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

みなさんは、当館に「あすかやまミュージアムショップ」なる場所があるのをご存じでしょうか？ 受付横で展開するこのショップでは、展示図録などの書籍だけでなく、絵はがきやクリアファイル、一筆箋などを販売しています。

実はここにある商品、そのすべてが当館のオリジナルなのです。どれも独自に製作したもので、他では買うことのできないものたちばかりです。

これまで数年製作にかかわってきた者として、一番苦労したのは、なんといっても「コン吉ぬいぐるみ」です。コン吉はキツネをモチーフにした、当館マスコットキャラクターですが、どのような素材で製作するのか、これは本当に悩みに悩みました。特に布の毛足の長さは、製品のイメージや手触りを大きく左右するものです。動物園や水族館で販売されているぬいぐるみを色々と触ってみたり、また時には館内の親子連れにリサーチしてみたりして、イメージに合う素材を探し続けた日々が思い出されます。

「コン吉ぬいぐるみ」は、昨冬から2代目が登場しています。より手触りをよくするために、そのお腹部分にはビーズもいれてみました。まだこの手触りを未体験の方！当館にお越しの際は、ぜひミュージアムショップに立ち寄ってみてくださいね。（安武）

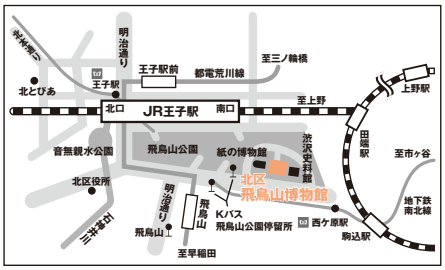
利用のご案内

【開館時間】
午前10時から午後5時
※観覧券の発行は午後4時30分まで。

【休館日】
月曜日
（月曜日が国民の祝日・休日にあたる場合は開館し、直後の平日が休館）
年末年始（12月28日～1月4日）
※このほかに臨時休館日があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体	三館共通券
一　般	300円	240円	720円
高齢者（65歳以上）	150円		
小・中・高	100円	80円	240円



・JR京浜東北線　王子駅南口より徒歩5分
・地下鉄南北線　西ケ原駅より徒歩7分
・都電荒川線　飛鳥山停留場より徒歩4分
・都バス　草64、王40系統　飛鳥山停留所より徒歩5分
・Kバス（北区コミュニティバス）　飛鳥山公園停留所より徒歩3分
※飛鳥山公園に隣接して有料駐車場がございます。

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館・紙の博物館をご覧になれます。

編　集　後　記

今年は年明け早々気になるニュースをキャッチ。南極の千葉県位の面積がある巨大なラーセンC棚氷に亀裂が入り、そのうち海に流れて大氷山になるのではないか。環境への影響があるやなしやというものです。5月に東京では30℃近くの日が続きましたが、年々夏の訪れが早くなっている気がします。

さて、暑さ寒さも彼岸まで。当館では下半期も魅力ある催しをたくさん企画しています。秋色に染まり始めた飛鳥山へお越しになりませんか。（中野）

平成29年度下半期の催し物予定

【秋】10月～12月

＜展示＞
- 秋期企画展「縄文人の一生ー西ヶ原貝塚に生きた人々ー」（10/24～12/10）
- 関連野外講座「考古楽講座 遺跡に行こう！秋special」（11/18・19・26）
- 関連体験講座「土偶をつくろう！」（12/3）
- 関連講演会（12/10）

＜イベント＞
- 飛鳥山3つの博物館合同企画GO！ ゴーミュージアム2017ー「勾玉ストラップをつくろう！」（10/7・8）
- 文化財講演会（10/15）
- 文化財公開事業「稲付の餅搗き唄」の実演と体験（11/25）

＜講座＞
- 中世農民闘争と荘園代官豊島氏（10/21）
- 東京9区文化財古民家めぐり「旧松澤家住宅説明会」（10/22）
- 東京文化財ウィーク北区文化財めぐり（10/28）
- 川柳で読み解く江戸散歩（11/4）
- 北区を彩った女性たち（11/5）
- ちびっこ体験講座「あすかやまのどんぐりで、おもちゃをつくろう！」（11/11）
- 幻の江戸東京野菜・亀戸大根の産地を訪ねる（11/30）
- 北区民俗学講座「北区の旧村地域を歩く！十条村編」（12/2）
- いざ、鎌倉！考古編・探訪編（12/9・16）
- 第31回新聞から読む考古学ー2017年下半期を振り返るー（12/24）

【冬】1月～3月

＜展示＞
- あすかやま十二支ー戌ー（12/12～1/31）
- 来て、見て、さわって！昔の道具（1/6～2/28）
- 関連ギャラリートーク（1/8・2/18）
- 春期企画展「若一王子社縁起絵巻と徳川家光」（3/10～5/7）
- 関連講座（3/24）
- ＜回想のための＞テーマ展示「オボエテマスカ？ ーあの暮らし・この道具ー」（3/10～6/17）

＜イベント＞
- 飛鳥山3つの博物館合同企画「飛鳥山1日大学」（2/17）

＜講座＞
- じっくり読み解く北区の浮世絵（1/13）
- 北区の考古学＜地域編＞赤羽（1/27・28、2/3・4）
- サクラという樹木を知る（2/24）
- 考古楽講座 遺跡に行こう！春（3/3・4）
- 常設展示活用講座「ドキどき考古資料にさわってみよう！」（3/17）
- 北区民俗学講座（3/18）

※ 催し物は仮称のものも含みます。（　）内の実施日は予定です。詳細は、当館発行の催し物案内、北区ニュース、ホームページをご覧ください。

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす39
発　行　日　平成29年9月20日
編集・発行　北区飛鳥山博物館
〒114-0002　東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
印　　刷　東京リスマチック株式会社

刊行物登録番号　29-2-044